

# 鋸南・暮らして交わる

## —地方と都市の住民が交流する生活拠点の提案—

LIFE and INTERACTION in KYONAN  
A proposal for a life base function of interaction  
among urban and countryside residents.

11323001 青木香織  
主査 篠原聡子教授  
副査 鈴木賢次教授 葉袋奈美子准教授

まちづくり 地域再生 都市農村交流 地域資源 ブルートゥリズム  
regional revitalization, exchange among Urban Areas and Rural Areas,  
town planning, local resouses, blue-tourism,

## 序論

### 第1章 研究の背景と目的

#### 1-1. 研究背景と目的

アグリツーリズムやグリーンツーリズムといった言葉に象徴されるように、都市の住民が地方を訪れる観光が着目されている。しかし、多くの都市の住民は、観光客として地域を訪れた際、観光スポットのみを訪れるため、地域住民と触れ合う機会が少ないのが現状である。そこにしかない場所やそこにしかない人こそが地域の本当の魅力であり、それらを活用することこそ、今後の新たな地域活性化の形として可能性があるのではないだろうか。

現在、日本の地方を中心に、過疎化や高齢化が進み、農村・漁村では後継者の不在や人材不足が深刻な問題となっている。その結果、様々な地域

の組織や活動の継続が困難になり、農村・漁村に存在する、都市にはない地域ならではの魅力が失われてしまう。

そこで、本研究では、町の魅力を構成する物理的な要素の抽出、地域住民の生活実態を把握することで、新たな地域活性化の形を見出すことを目的とする。研究の最後には、千葉県安房郡鋸南町を敷地に選定し、新たな観光スタイルを生むことを目的とし、「地方と都市の住民が交流する生活拠点」の設計提案を行う。

#### 1-2. 調査概要

本研究では、地域活性化における先行事例のインターネット調査と文献調査、また、地域資源抽出のためのフィールドワーク及びヒアリング調査の大きく分けて2つの調査を行った。調査概要は表1のとおりである。

表 1. 調査概要

	調査内容	調査対象	調査目的
先行事例調査	①地域活性化における「地域資源」に着目した事例調査	地域資源の活用を行う事例	地域活性化の成功例にみられる「地域資源」と「活用方法」を明らかにし、新たな地域活性化の形に必要な要素を抽出することを目的とする。
	②地域活性化における地域資源と「人材」に着目した事例調査	調査①の中でとりあげた4事例と新たな事例の計5事例。	調査①の結果をふまえて、5つの事例を対象として、地域資源の活用方法と人材の視点からみえることを明らかにし、新たな地域活性化の形を見出すことを目的とする。
実態調査	①地域資源を発掘するためのフィールドワーク	地域住民	フィールドワークを行うことで、鋸南町の魅力要素である具体的な地域資源を抽出、町の機能の実態を把握し、鋸南町の新たな地域活性化の形を見出すことを目的とする。
	②・生産者の一日の流れについてのインタビュー ・鋸南町についてのインタビュー	・鋸南町の特産物を生産、販売している生産者4名 ・地域住民10名	インタビューを行うことで、生産者の実態を把握すること、また、鋸南町についてのインタビュー調査を行うことで鋸南町の実態を把握し、鋸南町の新たな地域活性化の形を見出すことを目的とする。
	③都市と地方をつなぐ仲介者へのインタビュー	NPO南房総リパブリック	東京都と千葉県とをつなぐ取組の参考事例として、インタビューを行い、鋸南町の活性化に活かすべき要素を見出すことを目的とする。

### 1-3. 本論の構成

本研究論文は 6 章で構成されている。第 1 章では、研究に至った背景や社会的動向から本研究の目的を示す。

第 2 章では、調査対象地である千葉県安房郡鋸南町の人口や位置情報、また産業等の現状と課題を把握し、フィールドワークを行う上で重要な鋸南町の基本情報をつかむ。第 3 章では、数多く存在する地域活性化の成功事例から新たな地域活性化の形に必要な要素を明らかにする。第 4 章では、フィールドワークを通して、町の機能、地域住民の日常など鋸南町の実態を把握する。

第 5 章では、調査結果のまとめを行う。その結果を基に、第六章では新たな地域活性化の形を提示し、千葉県安房郡鋸南町を敷地として、「都市住民と地域住民が交流する生活拠点」の設計提案を行う。

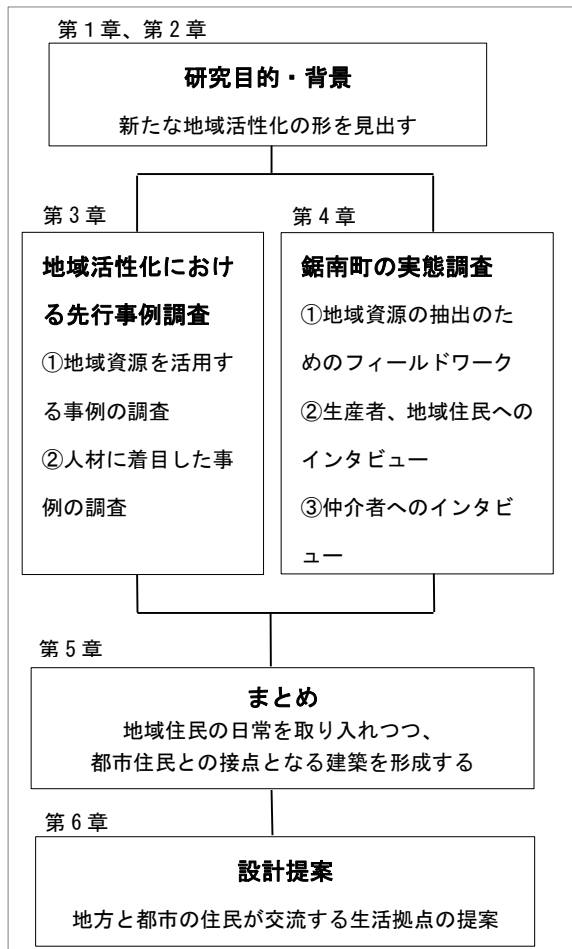


図 1 研究の構成

## 本論

### 第2章 調査対象地の概要

#### 2-1. 調査対象地選定理由

千葉県安房郡鋸南町は、東京都心から車で約 90 分と非常にアクセスの良い場所に位置し、自然、特産物などの豊富な地域資源が存在する農村漁村である。そのため、都市から程よい距離に位置し、地域資源が豊富な鋸南町ならば、都市と農村漁村交流が可能だと考え、敷地を選定した。

#### 2-2. 千葉県鋸南町の概要

鋸南町は南房総の玄関口に位置し、西にある東京湾、北に鋸山と、周囲を海と山に囲まれ、温暖な海洋性気候と東京に近い地理的好条件に恵まれ農業・水産業が盛んである。様々な産業が盛んである点は、大切な観光資源であると考えられる。

総人口は 8286 人（平成 26 年 9 月 1 日現在）であり、鋸南町総合計画（2011～2020）によると、平成 32 年の人口は 7,442 人になると予想されている。65 歳以上の高齢者人口は 3575 人、高齢化率は 41.2%（千葉県内 2 位）となっている。

平成 9 年の東京湾アクアライン開通により、東京都心から約 1 時間の時間距離で結ばれ、交通アクセスが非常に便利になった。また、JR 内房線が町西部を縦断し、町内に保田駅、安房勝山駅があり、特急さざなみ号で東京駅と約 1 時間 30 分で結ばれている。



図 2 鋸南町の位置

鋸南町は、東西 10.75km、南北 7.3km、総面積 45.16k m<sup>2</sup>で、東京都練馬区 (48.16 k m<sup>2</sup>) と同程度の広さである。年平均気温は 17 度で、冬は比較的暖かく、夏は海風があり、しのぎやすい。

東京からほど近い場所に位置するにもかかわらず、自然や特産物などの地域資源が多く存在する。特産物においては海産物をはじめとし、花や野菜など 1 年を通して様々なものが収穫できる。

### 第 3 章 先行事例の分析

#### 3-1. 地域活性化について

現在、人口減少の問題は地方をはじめとし、深刻な問題となっている。そのため、自分の住む町、生まれ育った町を活気づけようと地域住民が地域活性化に取り組む例は多くみられる。また、都市住民がゆかりのある地域で地域活性化を行う例も少なくはない。その活性化の形は多様である。

表 2. 地域活性化における先行事例

核となる地域資源	地域活性化の計画	対象地	活用方法
建築	森の学校	岡山県西粟倉市	廃校をオフィスとして利用。間伐材を加工した家具等を制作・販売を行う。
	集落丸山	兵庫県篠山市	空き家を再生・活用してオーベルジュとしたもの。
	神山パレー・サテライトオフィス	徳島県神山町	地域にある古民家を改装して、東京や大阪など都市に本社がある企業に貸し出している。
	月影の郷	新潟県上越市浦川原区	廃校となった小学校を改修し、宿泊施設として利用。学生が関わるプロジェクト。
自然	日本一夕日の美しい街	愛媛県伊予郡双海町	夕日を題材に地域住民を巻き込みながら、ソフトからハードまで行う
	みなかみ町	群馬県利根郡みなかみ町	利根川を下るラフティングや湧き出る温泉など自然の豊かさを活かしている。
	自然を体験する町	石川県能登町	田舎でしかできない体験を中心に農家民宿などを行っている。
特産物	彩事業	徳島県上勝町	地域の未利用資源を商品化し地域活性化を行う
	食の理想郷へ	山形県鶴岡市	地元の食材の魅力にスポットを当てたレストラン。郷土料理等、市民から寄せられたレシピ集の作成。
	集落全体がそば屋	福島県山都町(宮古集落)	集落全体がそば屋、母屋の座敷を開いている。
	サクランボ祭り と農村漁村体験	青森県名川町	農業体験修学旅行生の受け入れ
	農業と観光の融合	埼玉県神川町	地域の特性と産業を観光に活かしている。
	古代の塩づくり	広島県安芸群蒲刈町	塩づくり体験学習
歴史的遺産	小布施	長野県上高井郡小布施町	地域住民が主体となり、修景という手法で町の景観を整備している。
	門司港レトロ事業	北九州市門司区	歴史ある港町の復興を目的としてイベント等を行う。
	祭りと劇の似合う街	鳥取県鳥取市鹿野町	人と人との交流が盛んであった祭りという土壌を活かした「祭りの似合うまちづくり」を行う

そこで本章では地域活性化の成功事例において、どのような地域資源(建築、自然、特産物等)を、どのように活性化に結びつけているのか、活性化スキームを把握することとする。

#### 3-2. 地域活性化における先行事例の調査 1 (地域資源による地域活性化の形)

##### 3-2-1. 調査概要

###### (1) 調査目的

地域活性化において、地域資源を活かした事例を対象に事例調査を行い、「地域資源」「活用方法」を明らかにし、新たな地域活性化の形を見出すことを目的とする。

###### (2) 調査対象

千葉県安房郡鋸南町には、多くの地域資源が存在する。そのため、調査対象は、全国の地域活性化計画の成功例の内から、「地域資源の活用」を行う事例とする。

### (3) 調査方法

インターネットや文献を通して、地域資源を活用し活性化につながっていると思われる事例を調査した。

#### 3-2-2. 地域活性化における先行事例のまとめ

地域資源として活用されていたものを、(a)建築、(b)自然、(c)特産物、(d)歴史的遺産の4つに分類を行い、表2.にまとめた。

それぞれの事例は、地域特有の方法で、活性化に結びつけていることが分かった。

##### (a) 建築

建築では、廃校の小学校をはじめとし、空き家や古民家など、現在使われていないものを「再利用」という形が多く見受けられた。そうすることで、新築にはない「愛着」が生まれ、地域住民から親しまれる場所になると考えられる。

##### (b) 自然

自然では、以前は美しい風景を活用するなど、視覚的に楽しむ形が多かったが、最近では、川や海を活用したアウトドアスポーツや農家に宿泊し、大自然の中で生活するなど実際に自然を体験して楽しむ形が増えていることがわかった。また、体験型には指導者などの「人材」が欠かせない存在になる。

##### (c) 特産物

特産物では、食材を活用しているものが多かった。やはり、食は人間にとって必要不可欠なものであるため、誰もが関心を持ちやすいと考えられる。また、それらを支える生産者は欠かせない存在である。

##### (d) 歴史的遺産

歴史的遺産では、町並み保存という形が多かった。昔からある町並みを保存しつつ、発展させる形は昔と今が共存する町を表現できると考えられる。

#### 3-3. 地域活性化における先行事例の調査2 (地域資源と人材)

##### 3-3-1. 調査概要

### (1) 調査対象と目的

前項にて調査を行った長野県小布施町の事例にある地域住民が主体となり、町の景観を整備するはたらきのように、活性化を行う「人材」の存在が重要であると考えられる。そのため、地域の特徴的な地域資源をうまく、観光や地域活性化に結びつけるためにも、それをつなぐ「人」の存在が重要であることを把握した。ここでは、具体的に5つの事例(表3)をとりあげて、(a)地域資源の活用方法、(b)人材、に着目し、詳しい調査を行った。以上の2点に着目することで、各地域のオリジナルの活用方法の具体化、人材が地域活性化にもたらす可能性を明らかにし、新たな地域活性化の形を見出すことを目的とする。

表3. 調査対象

地域資源	地域
建築	月影の郷(新潟県上越市蒲川原区)
自然	みなかみ町(群馬県みなかみ町)
特産物	鶴岡市(山形県鶴岡市)
歴史的遺産	小布施(長野県小布施町)
人材	海士町(島根県海士町)

### (2) 調査方法

インターネットや文献を通して、また、実際に訪れて調査を行った。

### (3) 調査項目

上記の調査方法にて以下の3点の視点から分析を行う。以下3点の視点を選んだ理由は下記に述べる。

#### (a) 地域資源の活用方法

地域の魅力を地域住民が理解し、それらを最良の方法で活かすことが重要である。オリジナリティある地域活性につながるため、この点を明らかとする。

#### (b) 地域住民のまちづくりへの関心

地域住民が主体的にまちづくりに参加することは、町全体が活気づくと考えられる。そのため、地域住民がまちづくりにどれほど関心を持っているかを把握する。

#### (c) 地域住民と都市住民の関係づくり

継続的に、地域住民と都市住民の交流を行うに

は、大学との連携など月影の郷の事例にみられるように、何かしらの仕組みづくりが求められている。そのため、どのような方法で地域住民と都市住民の接点を生み出すべきか明らかにする。

### 3-3-2. 地域活性化における先行事例のまとめ

調査結果を表4にまとめた。このことから先行事例の調査2（地域資源と人材）で取り上げた5つの事例から地域活性化には4つの要素が重要であることがわかった。

- ①長野県小布施町の景観（地域資源）を地域住民が維持しつつ発展させていくような、地域資源を活かしたオリジナリティ。
- ②群馬県みなかみ町のインターネットなどを通じた情報発信を行い、町の情報を明らかにする、活動の透明性。
- ③島根県海士町の自らを犠牲にしてでも町のために活動を行うような働きをする人材の存在。
- ④新潟県上越市の月影の郷のような都市と地方が継続的に交流するための大学との連携など、継続するための体制づくり

### 3-4. 本章のまとめ

以上の調査結果より、本章では、地域活性化の計画において、①オリジナリティ、②活動の透明性、③人材、④都市との連携、の4つの重要な要素があると考えられる。なかでも、地域活性化を行う「人材」は地域にとって重要な資源でもあり、

表4.地域活性化における5つの先行事例

核となる地域資源	事例	(a) 地域資源の活用方法	(b) 地域住民のまちづくりへの関心	(c) 地域住民と都市住民の関係性
建築	月影の郷	廃校を宿泊施設に改修し、都市と地域の交流拠点とした。	月影の郷運営委員会に属する地域住民は月影の郷を盛り上げるため積極的に活動しているが、それはごく一部の住民である。	東京の大学と連携しているため、定期的に交流がある。
自然	みなかみ町	自然の資源を体験できるアウトドアスポーツ等に活用した。	地元学という地元の魅力を探し、新たに再編し、町の元気をつくっていく地域住民主体の取り組みを行うなど積極的に活動している。	体験コースが充実しているため、交流は生まれる。
特産物	鶴岡市	食文化に関するミュージアムや郷土料理をまとめたレシピ本を発行している。	商工会や生産者を中心に食文化創造都市委員会に所属し、積極的に取り組む地域住民が多い。	都市住民との交流は少ない。
歴史的遺産	小布施	修景という地域住民が主体となり、町の景観を保存しつつ、補い、整備を行っている。	「修景」を中心に、オープンガーデンという観光に民家の庭を開放する取り組みなど地域住民自らまちづくりに積極的に参加している。	オープンガーデンが都市住民との小さな交流拠点となっている。
人材	海士町	島という立地を利用した地域のブランド化とまちづくり、人材づくりのための資金づくり等を行った。	町長自ら給与カットを行い、町づくりの資金を抽出したことがきっかけとなり、地域住民が自らできることを探し、現在では地域全体が積極的に活動している。	都市住民への支援を行い、移住者を増加させている。

成功事例では、地域住民が積極的に取り組む例が多く見受けられた。そのため、「地域住民が地域に関心を持ち、地域活性化に住民が参加すること」は地域活性化を成功させるために重要である。そして、地域住民を巻きこむために、「地域住民の日常を取り入れること」が必要だと考えられる。そのため、次章では鋸南町の地域資源の抽出、日常の把握を目的とした実態調査を行う。

## 第4章 鋸南町における地域資源の抽出と考察

### 4-1. 調査概要

鋸南町の地域資源、地域住民の日常を把握し、鋸南町の新たな地域活性化の形を見出すことを目的とし、フィールドワークとヒアリング調査を行った。3つの実態調査概要は、表1にて述べている。また、本研究では鋸南町プロジェクトの活動も含め、フィールドワークとする。

#### 4-1-1. 鋸南町プロジェクト概要

鋸南町プロジェクトは、日本女子大学、早稲田大学、法政大学、横浜国立大学、工学院大学の5大学で取り組む協働プロジェクトである。2015年冬開業予定の「道の駅保田小」に伴い、町を知ること」を目的として、イベントの参加やワークショップの開催、フィールドワーク等を行っている。

## 4-2. 地域資源を発掘するためのフィールドワーク（実態調査①）

### 4-2-1. 調査内容

調査は2段階に分けて行った。第1の調査として、プロジェクト活動、町歩き、イベント参加を通して、鋸南町の具体的な地域資源を明らかにすることを目的とし、鋸南町全体のフィールドワーク及びヒアリング調査を行った。

次に、それらの調査結果をふまえて、JR保田駅から徒歩圏内の海沿いのエリアを中心に、町の機能、地域住民の日常を把握することを目的とし、フィールドワーク及びヒアリング調査を行った。

### 4-2-2. 調査結果

鋸南町全体の地域資源を [a] 自然 [b] 特産物 [c] 人材の3つに分類し、地域資源の持つ可

表5 地域資源の持つ可能性

地域資源	地域資源が持つ可能性	
[a] 自然	海	海に関連したイベントなど、海を通して人がつながりをつくることができる。
	山	山の中にある古民家のゲストハウスや山から見える景色も重要なリソースとなる。
[b] 特産物	海産物	漁村こそ味わえる美味しさや大胆な食べ方は、ここにしかないリソースである。
	花	花の管理は非常に難しいため、多くの人の協力が必要である。そのため、花を中心に人々の連携が生まれる可能性がある。
[c] 人材	商売人	地域住民も都市住民も利用する商店を営む商売人は都市と地方の仲介者の役割を担うことができる可能性がある。
	漁師	漁村だからこそ出会える人であるため、漁師との交流は都市住民にとって印象に残ると考えられる。

能性について以下の通りにまとめた（表5）。

また、JR保田駅からの徒歩圏内のフィールドワークの調査結果を地図にマッピングした（一部図3）。その結果、町の機能を4つに分類できることが明らかとなった（図3）。

### 4-2-3. まとめと考察

調査結果からは、自然・特産物の資源を支える「人材」が、鋸南町の貴重な資源である考えられる。特に、特産物（海産物、野菜、花など）の「生産者」は都市と地方をつなぐ接点となる可能性があるため、非常に重要な存在である。また、観光客は基本的に車で移動し、地域住民は海沿いに滞在しているなど、観光客と地域住民とが交わるような場所が少ないことが明らかとなった。地域住民も海沿い以外には滞在する場所があまりない。



図3 町の機能と地域住民の日常についての調査結果

### 4-3. 地域住民に対するインタビューとヒアリング調査（実態調査②）

#### 4-3-1. 調査内容

鋸南町の特産物を生産、販売している生産者を対象として、生産者の実態把握を目的とし、一日の流れについてのインタビューを行った。また、地域住民を対象として、鋸南町の住民の居場所の把握を目的とし、ヒアリング調査を行った。

#### 4-3-2. 調査結果

ヒアリングの調査結果を表8にまとめた。生産者へのインタビュー結果は本論にまとめる。

#### 4-3-3. まとめ

調査結果から、鋸南町には昔のように町を活性化したいと考える地域住民が多いことが分かった。後継ぎ不足や観光客の減少など、深刻な問題はあっても、意識の高い生産者やまちづくりに意識がある住民を中心に住民参加型の町づくりを行えば活気を取り戻す可能性があると考えられる。

表8. ヒアリング調査結果

	①日常	②観光	③町の変化	④鋸南町に必要なもの	⑤鋸南町の今後
漁師	よく行く場所は「海と家と飲み屋」	観光客が昔より減っている	漁師の数が減っている。	とくにない	後継ぎがきてくれるとよい。
商売人	お店を離れられない	水仙の時期は忙しい	商店街の活気がなくなってしまった。	高速バスが停まってくれればよい。	昔のように活気をとりたい。
道の駅きよなん案内人	買い物は隣町の館山に車で行く	お花が咲かない時期の観光客が少ない	夏の海水浴を楽しむ観光客がかなり減ってしまった。	公園や図書館、雨風をしのげる場所。	鋸南町内の組織連携を行いたい。

表9. インタビュー調査結果

(1) NPOの活動を始めたきっかけ
二拠点居住を始めた際に、地域住民に様々なことを助けてもらったため、地域への恩返しをしたいと考えたのがきっかけ。だが、自分一人では町の力になることができないためNPO団体を立ちあげて、活動しようと考えた。
(2) NPO団体の人々
多方面で活動している人が集まって行っているため、様々なことに取り組むことができる。
(3) NPOの活動が地域にもたらすもの
地域住民が気付いていない地域の魅力を伝えたり、集落に新しい風を吹き込むこと。
(4) 地域住民との関係づくり
相手に心をひらき、地域性に合わせてゆっくりじっくり関係をつくりあげることで、信頼関係を築くことができた。
(5) 二拠点居住とNPO団体の活動について
二拠点居住に興味があり、NPOの活動に参加する人もいる。この活動がきっかけで二拠点居住者が増えるとよいと思う。
(6) 今後の目標
100人規模以内のNPO団体だけでできることは限られてしまうため、様々な人たちと協働で活動したいと考えている。

### 4-4. 都市と地方をつなぐ仲介者へのインタビュー調査（実態調査③）

#### 4-4-1. 調査内容

東京と千葉県を結ぶ取り組みの参考事例として、自然を学び、体感する「里山学校」、自然の中でのづくりを行う「三芳つくるハウス」、南房総の食材をつかった「洗足カフェ」などの活動を行うNPO南房総リパブリックを取り上げる。インタビュー調査より、鋸南町の活性化に活かすべき要素を見出すことを目的とする。

#### 4-4-2. 調査結果

インタビュー結果の一部を表9にまとめた。

#### 4-4-3. まとめ

調査結果より、都心からのアクセスが良いという点から二拠点居住の可能性の高さが明らかとなった。また、地域住民との関係づくりは地域で活動する上での基盤づくりである。時間をかけて信頼関係を気づくことが重要である。

#### 4-5. 章のまとめ

第四章の調査結果を図4に示す。鋸南町の地域資源、住民の日常の把握を目的としたフィールドより、観光客や地域住民の行動範囲の違いが明らかとなった。やはり、観光客は観光スポットのみを訪れ、地域住民は海岸を中心に滞在しているため、両者の接点がないのが現状である。

地域住民へのインタビュー調査からは、鋸南町には昔のように町を活性化したいと考える地域住民が多いことがわかった。後継ぎ不足や観光客の減少など、深刻な問題はあるものの、意識の高い生産者やまちづくりを行う地域住民を中心に住民参加型の町づくりを行えば活気をとり戻す可能性があると考えられる。

都市と地方の仲介者へのインタビュー調査からは、二拠点居住の可能性の高さ、また、地域住民との関係づくりの重要性が明らかとなった。

以上の調査結果より、鋸南町ならではの魅力を維持するため、既存の建築を基に住民が滞在できる設えを形成するなどの小さな操作を行い、地域住民の集う場であり、かつ、都市住民との交流の場を形成することが、鋸南町の新たな地域再生の形になり得ると考えられる。地域住民の日常を向上しつつ、都市住民との接点を形成する。

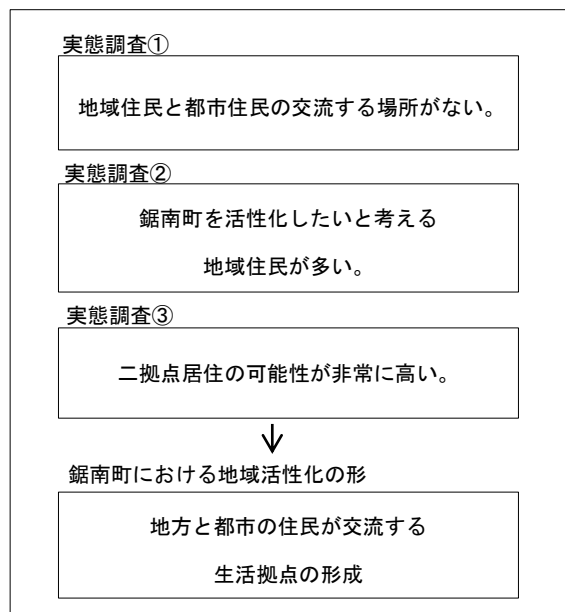


図4 第4章の調査結果のまとめ

## 結論

### 第5章 結果と考察

#### 5-1. 本研究における調査結果とまとめ

本研究では、町の魅力を構成する要素の抽出、地域住民の生活実態を把握することで、新たな地域活性化の形を見出すことが目的である。そのため、調査結果より抽出した鋸南町における新たな地域活性化の形に必要な要素を提示し、第6章では、新たな観光スタイルを生むことを目的とした「地方と都市の住民が交流する生活拠点」の設計提案を行う。調査結果から抽出した要素は以下の通りである。

■鋸南町における新たな地域活性化の形に必要な要素

(1)「自然・特産物・人材」という鋸南町の地域資源を活用すること。

鋸南町は、東京から近いにも関わらず、多くの地域資源に恵まれている。特に、「自然・特産物・人材」という資源には様々な可能性がある。なかでも、人材（生産者）は特産物を支える重要な要素であり、地域住民と都市住民をつなぐ重要な役割を果たすことができる可能性があると考えられる。

(2)地域住民を巻き込むために、日常を取り入れること。

第三章の地域活性化における先行事例の調査結果から、地域住民が参加することは地域を活気づけるために非常に重要であることが明らかとなった。そのため、地域住民の誰もが自然と地域活性化に参加できるように、地域住民の日常を取り入れることが非常に重要であると考えられる。

(3) 地域住民の日常を向上しつつ、都市住民との接点を形成する。

第四章の鋸南町の地域資源、住民の日常の把握を目的としたフィールドワークより、都市住民と地域住民が交流する場がない現状が明らかとなった。そのため、現在の鋸南町の魅力は維持しつつ、+αの操作で地域住民の日常を向上しつつ、

都市住民との接点を形成することが鋸南町をより魅力的な町にすることができると考えられる。

調査結果より、明らかとなった上記の3点を基に、第6章では、地域を訪れる都市住民と地域住民の交流を目的とした「地方と都市の住民が交流する生活拠点」の設計提案を行う。

## 第6章 地域活性化の可能性

### 6-1. 新たな地域活性化の可能性

地域活性化における先進事例の調査や鋸南町の実態調査を行い、地域活性化に地域住民を巻き込むことが重要だとわかった。そのために、地域住民の日常を取り入れつつ、都市住民との接点となる建築を形成することが、鋸南町における新たな地域活性化の形だと考えられる。本章では、具体的な提案として地域を訪れる都市住民と地域住民の交流を目的とした「地方と都市の住民が交流する生活拠点」の設計提案を行う。

#### ■新たな地域再生の形

暮らしを開き、暮らしを学び、暮らしを楽しむ。  
～暮らしてまじわる都市と農村漁村。～



地域住民の日常 × 建築 × 都市住民の非日常

地域住民と都市住民が小さな建築を通してつながりをもつ。その空間は、地域住民にとっては日常であり、毎日のように訪れる場所である。そして、都市住民にとってそこは非日常であり、都心にはない空気や風景がそこにはある。このような空間の形成は魅力的な町の形成へとつながる。

### 6-2. 計画提案

#### 6-2-1. 計画概要

本計画では、新たな地域活性化の形の提案とし、千葉県安房郡鋸南町を敷地とした具体的な設計提案を行う。

#### 6-2-2. 計画地の周辺環境

現在人気の観光拠点である「ばんや（食堂）」と今後、町の中心になるであろう「道の駅保田小（2015年冬開業予定）」は、鋸南町にとって都市と地域を結ぶ交流拠点である。そのため、ポテンシャルの高い、これら2つの拠点を含め、JR保田駅から徒歩圏内に8か所の交流拠点を形成する。



図5 鋸南町と計画地の関係

#### 6-2-3. プログラム

鋸南町に地域住民と都市住民の交流拠点を8か所（既存の施設を2か所含む）計画する。その空間は、地域住民にとって、毎日通うような日常の場でありつつ、都市住民との交流の場ともなる。新たに計画する6か所の交流拠点は、鋸南町の魅力を維持するという計画により、既存の建築を基に床や屋根、壁がのびることで新たな空間を生み出す。既存の建築の選定方法は、空き家、もしくは、公共建築とする。空き家に+αの操作を行うことで、使われていなかった空間を人が集う空間に変える。また、公共建築に+αの操作を行うことで、新たな付加価値を生み出す。

〈参考文献〉

- ・鋸南町：“鋸南町総合計画 2011-2020”，鋸南町（平成23年3月）
- ・増田寛也：“地方消滅” 中央公論社（2014年8月25日）
- ・川向正人：“小布施まちづくりの奇跡” 新潮社（2010年3月）
- ・香坂玲：“地域再生—逆境から生まれる新たな試み—” 岩波書店（2012年10月）
- ・田切徳美：“農山村再生—限界集落問題を越えて—” 岩波書店（2009年10月）

#### 6-2-4. 具体的な計画

既存の建築を含めた8つの交流拠点を計画する。計画場所と8つの用途に関しては以下の通りである。

##### ■ 8つの交流拠点

①えきとしよ  
既存建築：観光案内所  
用途：図書館

②軒下マーケット  
既存建築：空き家  
用途：市場

③見晴台  
既存建築：監視塔  
用途：ブルーツーリズムの拠点

④海キッチン  
既存建築：空き家  
用途：キッチン

⑤小さな森  
既存建築：神社・空地  
用途：公園

⑥裏山ハウス  
既存建築：空き家  
用途：グリーンツーリズムの拠点

⑦道の駅 保田小  
既存建築：小学校  
用途：道の駅

⑧ばんや  
既存建築：小屋  
用途：食堂

